

# 徳川家臣団大会2017

徳川みらい学会第1回講演会「徳川家臣団大会2017」を4月16日、「日本の近代化の礎となった静岡の幕臣たち 大政奉還150周年に寄せて」をテーマに、しずきんホール「ユーフォニア」で開催。徳川宗家18代当主の徳川恒孝氏のあいさつに続き、出席した幕臣の子孫の皆様を紹介。その後、樋口雄彦国立歴史民俗博物館教授が「旧幕臣と明治日本」、落合則子東京都江戸東京博物館学芸員が「川村清雄」について講演しました。両氏の講演要旨は次の通り。(文責・企画広報室)

## 「旧幕臣と明治日本」



国立歴史民俗博物館  
教授  
樋口雄彦氏

明治維新後、徳川家と幕臣たちは歴史の表舞台から追いやられて、歴史の教科書レベルでは、ほとんど登場しなくなりま

す。だからといって、彼らの歴史的な役割が消えてしまったわけではありません。負けた側になったことがくやしくて、がまんならなくて、行動に出たのが戊辰戦争でした。

やがて時間が経つと、もう少し客観的に歴史を見直すようになりまし

た。その代表的な人物が田口卯吉です。田口は、日本の歴史を西洋の文明史観に基づいて叙述した『日本開化小史』(明治15年刊)の末尾で、「幕府は歴史の流れのなかで、倒れるべくして倒れただけであつて、誰かに責任

をなすりつけるべきではない」という客観的な見方をしています。田口は、旧幕臣の子で、明治維新を10代前半の少年時に体験し、静岡へ移住し、沼津兵学校の生徒になりました。

徳川慶喜が明治35年、侯爵を授けられた時の祝賀会の講演会では「明治政府の建設的事業において、陸軍、海軍、他の省庁、大学で力を発揮して国づくりに貢献したのはわれわれ旧幕臣たちである。それだけの人材を旧幕府が輩出できたのは、慶喜公が維新の時に、戦争をして人を殺さず、朝廷に平和に大政を奉還し、静岡学問所や沼津兵学校をつくって子弟を教育することに意を注いだからだ」と自信をもつて語っています。

明治30年は、慶喜が名誉を回復し、静岡から東京に居を移し、旧幕臣も近代国家を建設する一員として働き、自信を取り戻した時期です。この年の旧幕臣たちの親睦会「同方会」の名簿を見ると、爵位を与えられた者、軍

人、文官、政治家、実業家、学者、医者、文人・趣味人、クリスチャンとして名を残した人が並んでいます。

彼らは、幕末に西洋の新しい技術や知識を身に付けて、その能力を評価された、新しいタイプの人材でしたが、一度は新政府軍と戦ったり、静岡へ移住する道を選んだ人たちでした。彼らが幅広い分野で活躍し、日本の近代化を様々な場面から下支えすることに、旧幕臣の役割がありました。

## 「川村清雄 海舟が愛し、家達が慕った洋画家」



東京都江戸東京博物館  
学芸員  
落合則子氏

川村清雄は、嘉永5年(1852)、ペリーが来航する1年前、將軍の目となり耳となる御庭番の家に生まれま

した。12歳の時、幕府の開成所画学局で高橋由一から西洋画法を学びました。

17歳の時、明治維新となり、人生が変わりました。6歳の徳川家達公に従つて静岡へ移り、親しく仕えました。明治4年(1871)、徳川家留學生として同僚4人とともに渡米。外山正一の勧めで絵を専門に学び、その後、パリ、ヴェネツィアへ渡り、通算10年間、西洋で絵を学びました。ヴェネ

ツィアの美術学校では、2年目の学年末試験で1等を受賞する天才ぶりを発揮しました。

当時の西洋画壇はジャポニズム全盛で、外国人の画家たちから、日本の意匠を建てるように言われ、それが清雄の画家としての人生を方向づけました。

この頃、英国に留学した15歳の家達公との再会を果たしました。

清雄が明治14年に帰国すると、勝海舟は邸内に清雄の画室を建てました。徳川家から歴代將軍像の注文を受け、5枚が完成。明治32年に海舟が亡くなると「かたみの直垂」を描き、終生傍らに置きました。

「江戸城明渡の帰途」は、江戸城の石垣を背景にした勝海舟、後ろには刀を持つて怒りの形相の幕府の陸軍士官とそれを制止する人物、海舟の足元には葵の御紋が入った瓦、松の実、松葉が描かれています。松は繁栄の象徴で、徳川の世の終焉をあらわしています。この絵は、江戸城無血開城という難事業を成し遂げた勝海舟の覚悟ある精神と緊張感に満ちた歴史の一瞬を象徴的に描いた「歴史画」です。



個人・法人会員を随時募集しています。皆さまのご入会をお待ちしております。

〈お問い合わせ〉 徳川みらい学会事務局 〈TEL〉 284-9660 〈HP〉 [徳川みらい学会](#) [検索](#)